

# 統一



第一百九十二號



目 次

佛教の女性觀(其四)

大僧正本多日生

南無妙法蓮華經

東洋大學講師境野黃洋

深敬病院訪問記

子爵五島盛光

慶長元和に生れしめば

僧正野口日主

歐洲紀行談

僧議士板倉中

報道

法華經講演集(至二三八頁)

大僧正本多日生

佛教の女性觀 (其四)

(妙教婦人會ニ於ケル講演)

本多日生

理的作用に外ならぬ怡も厭厭の如きものであると教へられたことゝである、要するに此等の思想は佛教東漸の後、支那日本在來の思想が混入して、純粹の佛教思想を昏亂して居たのであります。

さて今日お話するのは更に第四と第五との二ヶ條であつて、前者は娛樂を調へて信仰に入らしむることである、此は娛樂に依つて起る歎喜の念を善誘し來つて信仰海中に遊ばしむべく説かれたのである、今之を世の例に假りて言へば、世間には快樂主義と嚴肅主義との相反せる二主義があるが、これは恰も佛教の娛樂莊嚴と禁欲との二思想と相似して居る、其快樂主義と云ふのは凡そ人々が世間に躍躍して居るのは物質的衣食住を得んが爲である、約言すれば皆バンの爲めで俗に花より團子と云ふが即ち其團子が目的の代表である、尤も風流な人は花を見月を眺めて怡むこともあるが、其等の人も矢張多くの目的は酒肉に在る、即ちバンの爲めに外ならない、故に人間は皆斯かる快樂を獲るの最終目的と爲ねばならぬと主張するのであります、

處が一方には人間は清き行爲の爲めに生きて居るのであるから須臾も道を離れてはならないとて、彼の道學先生などは花見も遊山も許さないで、吾人の一生は如何なる苦痛困難があつても忠君愛國孝養等總ての人道を一時も念頭から離してはならないと頑くなつて居る之が即ち嚴肅主義である。

斯く社會には双方相對して旗を立てゝは居るが人情の趣く所終に奈何ともするに由なく、人は日一日と嚴肅主義を去つて快樂主義の旗下に集りつゝある現今の狀態である。が佛教にも亦此嚴肅主義に似た思想がある、と云ふのは前にも謂つた禁欲主義の教であつて小乘教は即ち之に屬して居る、小乘教では花を眺めて美しいと思ひ孩兒を抱いて愛情を感じるも、皆是れ慾念であつて苦果の原因たらざるは無しと觀する結果、人跡絶へたる深嶺幽谷に隠れ枯木落葉を觀じて眞理を覺得しようとする、其人情を無視して居る點に於て相似して居ると云はねばなりませい。

然らば嚴肅と快樂と何れが是で何れが非であるかと

けられる、現今之社會に行はれる普通の宴會とか觀劇とかに出席の爲めに更衣するのは、遺憾ながら墮落の意義の方が多いのやうに考へられるが、反之、今日のやうな會合に出席の爲めとなれば向上の意義と認めざるを得ますまい、で此例の如きは甚だ瑣細な事に属するやうではあるが、實は此處が大問題の分れる點であつて、將來の人生を啓迪する上に基からぬ關係を持つて居るから、苟しくも具眼者の輕視する能はざることである、娛樂の利用すべきこと如きであるが故に佛陀は之を婦人問題との關係の上にも解決を下して居られる、語を換へて云へば婦人の優順を以て男子の嚴格なる所を緩和しようとせられた、今若し佛陀の慈悲の中から娛樂的分子を除き去れば大分溫味の減殺されたるものと成つて終うであらう、けれども幸にも佛陀は含蓄されて居ることを玩味せねばならぬ、且つ諸姉も亦娛樂と信仰とを結合調和された佛陀の御意に對し奉

云へば、此兩主義は何れも偏倚せる思想であると言はねばならぬ、眞の心の定め方は何れを擇んでも宜しくない、一體人は總ての娛樂を絕對に捨てることは出来ないから、其快樂を善用すると云ふことが何より大切になつて来る、併し快樂の爲めには兎もすると罪悪を作り以て善徳を積むべきことを忘却するのが世人の常である、こは全く一は會合などの性質によるものである、會合の種類に依つては始めは眞面目にやつて居る振舞をする、二次會三次會となつては愈々禽獸と揮ふ終に亂舞に至り人間らしい所が褪せて來て動物に邁いは毒のある團子となるから大に警めねばならぬ、が然し今日の會の如く一皿の餌にも清らかな念を去らず、法悅の中に晚茶を啜ると云ふやうなのは即ち神聖なる快樂とでも云ふべきであらう、元來本會で美衣を成べく避けては居ますが、凡そ羽織を一枚着更へるにも其目的によつては墮落の意と向上の意との二様に見別り大に感謝せねばならぬ。

寔に佛陀は男子よりも婦人の爲めに此問題の解決に専念ましましたのである、其證として月上女經に恒に悦びの色を以て行者を慰諭し終に頤聲し給ふことなし

と説かれてある、意は佛陀は如何なる時でも一日として玉顔に憂愁の色を見せられたことはない、又如何な無智の者に向つても恁く高尚なる教義が汝輩に解るものかと云ふやうな態度をせられたことはない、と月上女が佛陀の有様に感得して讀へた一例である、予も此態度を現代の婦人にも有りたいと望むものである、希くは諸姫も如何なる場合に於ても顔を整ひめないやうに心得て戴きたい、何故なれば例へば姑が嫁と語るにも話柄は左程になくとも、面容の表情によつて甚だしく嫁の優しい心情を傷めしむることがある、男子ならば少々皮肉に云はれても大して氣にも止めないが女性になると腹の底までも響くものであるからである、又涅槃經には佛陀の御心は月光の如く親み奉り易い、

智力に強いのは如何にも婦人には近寄り難いものであるが佛陀に遇ひ奉る時は清芬流るゝ春苑に在て玲瓏たる月を眺めるが如き心地を起さしめられるものであると説いてある、

次に佛陀は婦人の特に美服を好む精神に因つても亦多くの説法をせられた、其概要を言つて見ると、衣服縗珞の美麗なるを嗜好するは良いが心にも亦其美を移さねばならぬ、然らば心の美とは何であるか、曰く第一に菩提心である、換言すれば佛陀に成らうとする向上的精神と下衆生を教はんとする慈愍の精神、是れ即ち心の美衣である莊嚴である、人若し此大精神無つたならば恰も美衣や縗珞を剥脱したやうな恂に見醜いものではなからうか、又次に怖畏の精神と後悔の心とは佛陀を信じ奉る婦人の美衣とはならない、若し怖畏の心歇むときなく後悔の心絶へないときは恰も衣を裂かれ冠を落されたやうなものであると、如何にも左様ではあるまいか、此等は積極的に教訓された方面で美衣を飾るのは善い、其代り心にも錦織を飾れと仰せら

以上は爾前經に於て現はれた娛樂の一端であるが、これが法華經に來つては序品の四華六瑞となつて現はれたので、衆美の代表とも詠ふべきものであらう、今此天井を裝飾せる造花、諸姑が敷て居る坐布團、此等は小乘教にては決して許せない所であるが、法華經では娛樂として大曼陀羅華をも雨なし天鼓をも擊つて歡喜満悅の裡に説法して居られる、又佛陀の御容姿は提婆品にも微妙の淨法身相を具せること三十二八十種好を以て法身を莊嚴せり

と説いてあつて、彼の出山の釋尊の如く桂碎弊衣の乞食坊主のやうな姿ではない、又淨土にしても七珍寶を以て莊嚴せりと説いてあつて禪宗などでは説かぬ所である、淨土宗などには似たやうなことも説かれてはあるが矢張實在的の意味ではない、然るに法華經には實相の上から説き來つて永劫不滅の莊嚴として明された、此の如き次第であるから此等の真意義を味つても法華經に於て如何に娛樂莊嚴の重要視せられて居るか

れたのである、而して之を以て吾人は佛陀の大慈悲は男女等しく教濟せんとするにお坐しますは勿論であるが、就中女子には一切の娛樂を捨てさせて冷たい情を以てのみ信仰させやうとするのは、畢竟不可能に終ること明かであるから、此美服を欲する心を信私に誘致すべく考へられた、特に婦人の爲め起された大慈悲なことを知らねばならぬ。

茲に一佳話が殘つて居る、或時月上姫が美装を凝して佛陀の御許に參る途中舍利弗に出会つた、舍利弗は例の阿羅漢の上首であるから月上姫の姿を見咎めて言ふには、佛陀は極めて嚴肅な方であるから貴嬢のやうに美麗なる衣冠を纏ふことはお好みにならぬ、況して拜謁を賜ふなどは思ひもよらぬ所であると諷めた、が月上姫はたゞ微笑むで、否々佛陀は平素より妾等には莊嚴を忽せにしてはならぬと仰せられました、と其儘蓮歩を過ぎ去つた、遂て月上姫は佛所に往詣て、得も言はれぬ微妙な音樂を奏して多數の士女を悦はせ遂には信仰に導いたとのことである。

を窺知するに難くはありませんまい、  
宗祖日蓮聖人も此間の意を信仰に應用して  
妻のをとこををしむが如く、みめかたち好き人紅白粉をつくるが如く法華經には信心をいたさせ給へ

(聖語錄四二四三参照)

と慈教された、妻の夫を惜むが如くとは子の母を慕ふが如くと云ふのとは少々違う、其所には怡しいとか喜ばしいとか云ふ意味がより多く含まれて居る、紅白粉をつくるが如くとは言ふまでもない一種の莊嚴であつて、濃薄に偏せず過不及なき所に眞の美の表はれる如く、信心も狂的ならず冷淡ならざるやう心懸けねばならないとの意である、又彼の持法華問答抄に  
暮れ行く空の雲の色、有明け方の月の光までも、心をもよほす思なり

と仰せられたのも、夕陽將に没せんとして斜陽晚霞を射て餘光岫雲を照らす夕映、或は紫雲既に東天に暉顯たるに未だ斜に樹梢に懸れる残月を見ても、彼の美しい處に佛陀は御坐するかと欣慕の念を起す、こ

れも亦佛陀の親み易い方面からの信仰である、彼の不動の信仰の如く其相形の恐怖の所から、盜賊の忍び込んだ時にはあの恐怖の目を以て瞼むで下さるからと云ふやうな馬鹿々々しい考へからではない、妻の夫を惜むが如き心持を以て佛陀に書うのである、東京地方には帝釋の信仰が流行して居るが、あの恐い三角の眼を見ても亦到底暮れ行く空の雲の色の美感にうたれて渴仰の念を想起するやうな信心は得られまい、鬼形鬼子母神の如きも然りである。

抑も佛陀を觀奉るには三方面があると思う、第一は真理の側から觀たる即ち一念三千の實相觀の上に意識される佛陀で、第二は善の方面より毎自作是念の大悲願に信感して、子の親に對するが如き敬慕の意から觀奉る佛陀、而して第三には此妻の良人ををしむが如き感を以て對する觀方である、今この三つの觀方を一言にいつて見れば、マコトとスキとアリガタイとの三である、男性の觀るのは多くは、マコトの方で女子のは太抵スキなる方であつて、何れかと云へば女性の觀方の

に御説教を拜聴に行くとき着初めするやうならねばならぬと思ひます、斯くしてこの信仰を躬に行つたこととなるからである。

次に第五の「母の恩を重んじて孝養を行はしむ」といふのは、佛陀は恩に種々ある中、尤も吾人に直接なるが爲めに、特に母の恩を擧げて居られる、情々考へて見ると人が少くとも眞人間になり得ることは、大部見ると學校教育などはそもそも未の話ではあるまい、近來頻りに檢舉される不良少年の如きは、温き悲母の手に保育されなかつた爲め、心終に僻むで墮落したものが多く、母の温い懷に成育されるからである、それから十中の八九であるらしい、又先達檢舉された無政府主義者……予も特別に公判の傍聴を許されて日々出かけ居るが……彼等は聞くも戦慄するやうな陰謀を企てたのであるが、其仲間に菅野菅子といふ婦人もあつて、溢るゝ程立合人傍聴者の押詰めて居る法廷で、彼女は吾人が口にだにすることの畏多い罪悪を、恬然として憚る様子もなく喋々自白しつゝあるが、彼は大抵

方があつたとして我日蓮主義の特長たるや此方面を大に發揮した點にあるのである、彼の今末法に入つては信を以て惠に代へよと宗義上定まつて居るのは是處であつて、此點に於ては確に女性に降伏したものといつても過言ではあるまい。

大體以上の如き次第であるから私の諸姉に對する希望としては、怡も有明け方の月の光暮れ行く空の雲の色を見て直ちに歡喜せざるを得ない信仰の如くに、諸姉の信仰を其實生活の上に怡しく一致せしむるやうに勧めて貰いたいのである、舊慣の如く法要の日などには御馳走をして、特に不味い精進料理で一日を隠氣喫く過し、桃の節句等の御馳走には美味しい料理に舌鼓を擊つて、晴れ／＼して遊ぶといふやうのは大なる謬弊ではないか、聖人が「五節句のときにも南無妙法蓮華經と唱へ」と訓へられた意味は、嘗に五節句のみならず、元旦の若水を酌むにも屠蘇を飲うにも、又は白粉を粧ふにも此心持をもつて爲なればならぬと覺り奉らねばならない、又春着を新調しても先づ第一母の保育が惡るかつたか又は社會に出ても温きホリュもなく寂寥しく人と成つた爲め、世を極めて冷たきものゝ如く悲觀して、終には爆裂彈でも擲げやうなど、恐しい金てを起すに至つたものである、之に反して古來の英雄等は皆母親が傑かつた、母さへ傑らければ大抵の子は人一人前位にはなられるものである、故に佛陀は「母ありて我あり」と仰せられ、宗祖も天よりも生せず地よりも出せず皆母より生ず」と仰せられたのである、寔に感佩すべき御高訓である、目にして眼鏡は入浴すると曇るが肉眼は曇らない、是れ母から生んで貰つた目であるからである、然らば吾人は四肢五體の不自由なく動かさるにつけても、母の御恩の鴻大なることを感謝せねばならぬ。

今母恩に就て一例を擧げてみやう、轉女身經に無垢光といふ婦人が

若し母發心せば我れ已に阿婆の恩を報すと爲すと喚むで居る、阿婆とは母上のことであつて大體の意は、母の恩は高厚にして何物を以てするも報ひ難い、

れも亦佛陀の親み易い方面からの信仰である、彼の不動の信仰の如く其相形の恐怖の所から、盜賊の忍び込んだ時にはあの恐怖の目を以て瞼むで下さるからと云ふやうな馬鹿々々しい考へからではない、妻の夫を惜むが如き心持を以て佛陀に書うのである、東京地方には帝釋の信仰が流行して居るが、あの恐い三角の眼を見ても亦到底暮れ行く空の雲の色の美感にうたれて渴仰の念を想起するやうな信心は得られまい、鬼形鬼子母神の如きも然りである。

抑も佛陀を觀奉るには三方面があると思う、第一は真理の側から觀たる即ち一念三千の實相觀の上に意識される佛陀で、第二は善の方面より毎自作是念の大悲願に信感して、子の親に對するが如き敬慕の意から觀奉る佛陀、而して第三には此妻の良人ををしむが如き感を以て對する觀方である、今この三つの觀方を一言にいつて見れば、マコトとスキとアリガタイとの三である、男性の觀るのは多くは、マコトの方で女子のは太抵スキなる方であつて、何れかと云へば女性の觀方の

が然し唯一一つ道がある、母をして佛道に誘導し光ある生涯を送らしめ永久の生命を得せしむることである、若し幸に然かすることを得たならば幾分報恩の道を盡したといひ得られやう、また眞にこれより外に道はないのであると云ふ義である、そして尙續いて詳しく「九ヶ月の中に於て」云々とて、母は我れを懷妊してより九ヶ月の間に身は病苦に悩みつゝもなほ寝ても醒めても胎教を怠らず、生命を培して分娩すれば乳よ犢よ起てよ歩めよと慈育至らざるなく、漸く一人前に育くみ上げるまでの苦勞は一通りではないといふことを説いて居る、今日は時間が無いから略して置きますが今一つ摩耶經の中に、佛陀が御涅槃の際法を説て往の恩を報せん願くば母と眷属と届來して此處に到り給へ

と仰せられたとき、直ちに母君摩耶夫人は忉利天から降臨され佛陀は母君の爲め、臨終の身を起して報恩の說法を爲された、經に故に棺より起つて合掌し歡喜して歎し用て所生の恩と仰せられたとき、直ちに母君摩耶夫人は忉利天から降臨され佛陀は母君の爲め、臨終の身を起して報恩の說法を爲された、經に

と報じ我が孝感の情を示す  
とある、斯くされたのは一は以て生を母胎に受けてより以來の大恩を感謝し、一は以て母恩の殊更に重厚なり所以後世にも遺せんとの御意からせられたことで、吾人は此文を拜して佛陀の有り難い恩召を一層痛切に感する次第である、幼けない比は母恩を語つても五六十になると最早口にも出さなくなるのが世人の常情であるが、佛陀は八十才にして御入滅の夕に至るまで其を感謝せられたのは、吾人の最も肝銘して龜鑑とすべき事ではあるまいか、宗祖にしても既に諸姉も御存知の如く母君の爲め延命の祈念を修し、又は六十路を超えさせられてなほ思親閣の峻嶺を攀ち、一日として拜鄉の禮を缺かされたことはなかつた例など、悲母の孝養に御心を注がれた方である、諸姉よ聖語錄の五百四十四頁の前後を拜讀し給へ  
母の御恩の事殊に心肝に染みて貴く覺え候、飛鳥の子を養ひ地を走る獸の子にせめられ候こと目もあてられず魂もきえぬべく覺え候、其につきても母の

## 南無妙法蓮華經

(東京神田和強學堂に於ける橋香會大講演會の講演也)

境野黄洋

など實に涙のこぼる程深切に教へられたことが解る尙多くの例もあるが此以上言を費す必要もありませんまゝ要するに之も亦母恩の高大なることを示して女性の軽んずべからざることを教へられたに外ならない。佛教の女性觀は以上數回にお話した如く決して女性を嫌つたものでなく、寧ろ貴ぶべきことを明かにしたのであるから、就中我日蓮主義を信奉する諸姉は、速に先づ自ら過去の迷妄謬想より覺醒して次で他をも誇ひ、遠慮なく如何なる苦衷をも來つて訴へ俱に共に永遠の慰安を得られんことを偏に希望致します、

只今小林君の極めて内容豊富なる御講演がありましたが、私はオノの挨拶に過ぎない。小林君は昨夜徹宵眼を醒して色々の事を考へられたさうであるが私はよく寝て終つた。そして今朝になつて考へやうと思つたが其の間がなかつた。其れといふのは午前中、上宮教會に出演しなければならなかつた爲で、これでも中々賣つ子であります。で、斯會に參つてから外の方々の御講演を拜聽しながら何か考へ出さうと思つた張り出されてあるが、これも幹事が来て演題をと請求された時に未だ無論何も考へて居ないから、兎に角南無妙法蓮華經と出して置けば何處かで打突かるだらうといふ投機的の思ひ付きで出した爲め、斯様な事にな

つて居るのである。……兎も角も小林君のお話を聞きながら一寸思ひ付いた矢張り投機的な考を不斷言ひだして居ると、取りませてお話しよ、と思ふのである。さて日蓮聖人を以て豪傑的とか英雄的と云つて、其の強き半面のみ鑑仰するのは決して眞相を觀た言では無いと小林君は言はれたが、これは尤も至極である。が併し此も考へ様によると、廣き意義から言へば豪傑とも英雄とも考へられぬでもなからうと思ひます。單に英雄豪傑といへば、全く腕力的な武人に命けた言ではあるが、併し廣義よりいへば戦争的の豪傑もあれば經濟的の豪傑もある昔は腕力競争の戦国時代の豪傑英雄であつたが、然し今日の様な時勢では金を儲けるに巧みなものが眞の近世的の英雄豪傑ともいふことが出来るであらう。又一方から云へば精神の方面にも眞の英雄豪傑はあるのである。若し今聖人を英雄豪傑といふならば、其は精神的の意味に於て言ふのが適當であらう。

近頃澤初政太郎氏が文部の當局者其の外諸學校へ印

る。然るに現代の人は金にさへ成れば何處までも屈從して行く五斗米の爲に膝を屈せんや所ではない。時と場合によつては脊骨でも屈するのである。澤柳氏の議論も、勿論、批難をすれば、理屈の付け様もあらうけれども、確に時代の缺陷に觸れて居る點があるに違ひない、餘りに金錢を賤めた昔の武士時代の餘弊を匡救せんとて。福澤先生などは頻りに拜金主義を鼓吹せられたことがあつたが、これも時代の要求である。然しその極今日の様に何でもかんでも金さへあればといふ世界になつては、必然澤柳氏の様な説も自然出て來ねばならぬものであらう。時代の潮流は動と反動との波で搖れて居ることである。……處が國民新聞紙上での學生が金儲けを目的とせるものゝ、多いとは事實である。然し人といふものは本來金を欲しがるもので、昔も今も同じことである、何も敢て事珍らしく今更驚くべきことではない。維新當初の頃、岩倉公の如きは將來は公家とても大に金を儲ける時代が來ねばならないと

刷物を配布して近來の日本學生は一般に金の儲かるとのみを目的として居るが、學問をする目的を唯そればかりで定めるのはよくない、ナト儲からぬ方面にも注意する様にならなければならぬ、昔の人は其の學問をするのに、常に儲かる儲からぬといふ物質的方面のことはかりは考へなかつたといふ様に論せられて居る。併し古人であるからとて決して儲からぬとが好きであつたのではない。否、矢張りどちらかといへば、金を欲しがつた連中が多かつたとは決して疑ひがない、然しあ偶には欲しがらぬものもあつた、「我豈に五斗米の爲に膝を屈せんや」とど言つて超然として物質界を睥睨して、氣はつて居つた人間も、たまにはあつたのである。此くの如き人は現代の人から見たら、誠に迂遠と笑はれるであらう「清貧」などといふ語は、今日は物笑の種になつた。然しかる思想と意義を有するものがあつて、此の平凡な物質的生活を白眼で見るといふ人間の居るとも、確に一つの力である。彼は兎も角も物質以上別天地に一個の理想郷を開いて樂んで居るのであつて。其用意をされたといふことである。諺に「馬鹿と例巧は三十年違ふ」といふが全くその通りである。つまり今日、青年が金を儲け様といふのは昔でいへば封侯の志を建て、一國一城の主ともならうといふ志なのである。往昔戦國の世に身匹夫より起つて霸を天下に稱へやうとの大志を抱くものと現代素寒貧より興つて大金を握り天下財界の牛耳を握らうと志す者とは同等の價値あるもので、若し今日此の位な雄志がなくて無やみに書冊でも讀んで居る様な、そんな意氣地のないことは、しかたのあるものでない、今日の學生大に金を儲けんと志して可なりであるが、唯一轉語を最後に下すべし、曰く正直にして金を儲けよ……これが山路君の説である。

私は之を見て最初は唯尤もな説だ位に思つて居た。然し二度目少し考へ直して見るとどうも感服が出来なかつた。何故なれば山路君の所謂正直にして金を儲けよとは理窟は成程尤もであるが、然し退いて思ふに金といふものは正直にして儲かるものであるか、どうか、

それから轉じて所謂戰國時代の一國一城の主となり、志を爲し得たものがあるか、どうか、之を熟考へて見ると、いふ封侯の志を立てたは果して正直にして、志を爲し得たものであるが、決してあるべきものではないといふと見たのである。戰國時代の歴史を通觀するに彼の一介の窮措大より起つて關八州併呑の基礎を建てた北條早雲、彼は英雄である。然し其の根據地たる小田原は詐欺的奇策を以て之を奪つたではないか、即ち當時小田原の城主であつた大森藤頼に願つていふには、私の部下のものは盛に狩くらをやるので國內の獸類は近頃皆當領を逃げて貴領の箱根へ這入つて終つた、就ては勢子のものをして貴領から獸を少し追出させたいと存するが、何卒此儀お許しを願ひたいと申込んだ。乃て大森の方では早雲に別に悪計のあるものとも神ならぬ身の知る筈なく、直に承諾に及んだから早雲得たり畏しと其夜兵數百、下甲冑に身をかたり、上には狩獵の装をさせた居る。然し其の詐術に於ても恐らく日本一なるものである。徳川家康は、どういふものか、其の天下を取つた手段が卑劣であつたといふので、非常に人に嫌はれて居るのであるが、然し秀吉の卑劣は實に更に之より一層甚しいのである。秀吉を公明な英雄の様に思ふのは、一つの秀吉に対する迷信である。此の如く凡そ戦雄豪傑といはれ、比較的善良なるものでも不成功に終れば惡黨を以て貶斥されたのである。正直も不正直もあつた者でない。明智光秀は勿論主を殺し、親を殺したも同様の大罪人である。然し今日に至るまでなほ通賊として呼ばれて居るのは何故であるかといふと、實は彼のしたことが失敗に終つたからである。若し信長を殺して、山崎の一戦に秀吉を斬り、終に天下一統の業を完うしたらばどうであらう、彼は果して悪人で終るであらうか、英雄豪傑と呼ばれるであらうか、……

後、信長に事へ丹波龜山に於て五十萬石、江州長濱に彼はもと細川の家來であつたが、故あつて浪人をして、引連れ、箱根山に入りこみ、夜半不意に小田原城を奪つたものである。早雲の戦争は多く之に類して居る、まことに詐偽の大將ではあるまいか。米澤へでも行つて、たとへば呼び捨てでもしようものなら必ず衆人の怒りに觸れねばならぬ程の上杉謙信、彼は全く豪傑ではあるが、然し如何なる事情の伏在せるにせよ其の親父長尾爲景の死後、兄晴景と争ひ晴景を自殺せし武田信玄は幼時馬鹿顔として其父に疎んせられ、父信虎が弟信繁を立てんとしたといふので、家老と相謀りて父を逐出し、信虎は八十餘歳に至るまで生涯定住なく、浪人で身を終つたのである。さうして信玄の長子太郎義信は、また謀叛の嫌疑とあつて信玄に殺された。其の事情はよしあつても其の父の放逐者、其の子殺しは、とても正直な英雄の評は下し得ない。然らば織田信長は如何これも色々理由はあらうけれども、兎に角彼の天下は一旦主人とせし將軍義昭を逐つ拂つて取つた天下である。太閤秀吉は豪傑では日本一といはれて於て十萬石、兎に角一代に六十萬石に成り上つた傑物であつて決してそんなつまらん人間ではなかつた。けれども悲しい哉最後が失敗に終つた。之に反して秀吉は畢竟織田家より天下を騙取したのである。幼少の三法師丸を立て、柴田瀧川の織田家の老臣を殺し、主人筋の信孝を切腹させ、終には同じ主人の信雄を殺さんとしたのである。それでも成功したから不世出の英雄といはれるのである。英雄と悪人の差は唯一歩の差で負ければ悪人勝ては英雄であるのである。元就是毛利家相続の問題起り未定評議の最中に弟弘成をして切腹させた毛利家を自分で相續した人である。以上數へ来れば所謂封侯の志を爲し得たものは何れも皆惡黨ならざるものはない。精神的の側から見ると決して英雄豪傑とはいはれないのである。然るに男子、封侯の志を立つるの意氣なかるべけんや、而も最後に一轉話を下すべし、曰く正直にせよと、まことに結構であるが然し正直にしては其の英雄豪傑とはなれぬを如何せんやである。今諸君に金を溜めよ然し正直にせよと勧め

ても、正直では留まらないのを如何せん、何よりの證據は私である。……山路君も恐らく金を儲けた實驗がなからそんな野暮を言ふのであらう。金儲けもよい、勿論強ち悪いといふのではない、然し社會の一角には痛我慢でも金の入らん富貴を見ること土芥の如き人間があつてこそ、人生は釣合が取れるのではないか、天下相率て唯金、唯金では目茶々々である。此の經濟的戰國の時代に處し、封侯の志を立てゝ、金を儲けるのもよい、必ず儲かるに相違はあるまいが、同時代に精神的英雄なるものが現はれて、物質以上の別乾坤を開拓し、人間の樂地を現實以上に求めるといふとも、また大に意味のあることである。……日蓮聖人の如きは此の方面に立つ精神的大英雄である。英雄僧といひ、豪傑僧といふ、此の意味で言ふのならば、決して誤りではない。

日蓮聖人は實に精神的英雄である。……聖人の「御書」の中には、寄附金募集等もなければ、御布施樹募の方法も説いてはなく、物質には縁の遠い方である。

からは、多少「死」の問題も段々深く痛切に考へられる様になつたのである、が此のときに「死」のとを大問題として考へて來た佛教の或る系統は、日本へ來たために國性に變化されて次第に「死」の問題を現實に繰り上げ、「死」から連に現實生活の問題に戻つて來たといふ傾きもあるのである。例へば念佛宗の如き支那風から云へば死ぬる方のみの用意の宗派であるから、死際といふことが何よりも第一等に大切な重要問題である。そこでかかる穢れた我々の散亂の心をもつては、とても立流な淨土に往生も出來さうもない。念佛を稱へばへすれば愈臨終斷未魔の際には、此の散亂心は定心と轉じ、寂然たる心のさまとなつて極樂に往くとひ煩惱は斷せんでも、定心にならんでも、臨終の折とが出来るのであるとか、或は臨終になつて煩惱を断じて極樂に行くことになるのであるとか、若しくは、たゞが出來るのであるとか、或は臨終になつて煩惱を断じて極樂に行くことになるのであるとか、何んでも、臨終には「死に際」といふのが即ち「死に際」を八かましく

然し聖人の教は全く實生活には無顧着で、單に精神的とのみ主張し、山林に閉ぢ能つてばかり居るといふ流儀ではない。それが即ち聖人の特殊の面目である。昔の佛教者は皆精神的の方面にのみ重きを置くに偏し、殆ど實社會には顔も出さないものを高しとしたのである。之も偉いには相違ないけれども日蓮聖人のは現實世界に自ら打て出て、此現實世界の經濟にも日蓮主義を用ひることが餘程他の宗教と趣を異にして居る所で、最も明に其の特長を發揮して居る點である。只今も「死」に就いての御話があつたが、「死」といふものは何となく心細い感じがする、宗教は何れも「死」といふ問題を談ずる、故に世人は宗教は死ぬ時に要るものゝ如く思つて居る。又さう教へて居る宗教もある。殊に淨土教の盛んな處へ行くと死ぬ事より外に宗教上からは考へて居ない。然しながら日本人は元來其の本性は極く現實的であつて死の時などを憂慮しないのが特長である。佛教の日本へ來る以前の我々の祖先は之を歴史の上で證明して居る。然し佛教が来て言ふ所以で、宗教の第一、イヤ唯一の大問題を「死」の問題として「死にぎわ」といふことをのみ繰返して、いうて居るのである。然るに之が親鸞上人になるとどうあります、其宗の教義では「死に際」が唯一の大問題にはなつて居ない所謂平生業成であつて、往生は「死に際」にきまるものでない、往生の業事成辨は信心を得た一念其の時、即ち平生の時に決定すると言つて「死に際」話を捨ててしまつたのである。即ち問題は臨終から、平生に逆戻りをして居るのである。之は日本淨土教に始めて見ることの出来る新説である。淨土宗でも西山派の證空上人は、「念佛即往生、往生即臨終」と云つて居る。即ち往生といふのは、肉體の斷末魔なる臨終の問題ではない、我が名號に合對した時が往生で、臨終といふのも實に其の時が臨終なのであると云つて、臨終といふのさへ「死に際」の事ではないと云ひ、問題を現實に繰り上げて居る。之を時宗の一通上人は更に切り詰めて「平生即臨終」と云はれたのである淨土門の教でさへも斯う變化して來て居る

のである。

物質文明には確に弊もあるが、然し一面から見ると、また頗る立派なものであることは疑かない。人は動もすると物質文明をむやみに阻ふ者もあるが、さればとて其等の人々が電車も汽車も西洋料理も好みかと云ふと必ずしも左様ではない、或は却て大に好きであるかも知れない、口では彼れ是れ言つても、心から今日の文明に感謝して居ないものは、決してないのである。其の弊害は之に因はれるから起るのである。殊に此の物質文明が我々の思想の上に大なる影響を與へて居るもののは活動の觀念である。活動とか労働とかいふことの價值の認められたのは、確に現代物質文明の賜物で、所謂現代思想的一大特色である。佛教の中には、非常に厭世悲觀の傾向のある派もあるが、然し大體に於て決して實生活と離れるばかりを能として居るものではない、中にも天台などでは、治生産業、皆佛法であるともいひ、其の外密教なども、非常に現實主義の教である。尤も此等の諸種の説を一々批評することは今時代の所謂英雄豪傑と比較し、或は同視し以て同意義を以て英雄と解し居ることにもなるのである。が然しその日蓮聖人の人格は、偉大なる精神的聖人といふべきもので、決して單に「押し通す」とか策略で目的を達するなどといふ、そんな意味の英雄でも、豪傑でもない。

さて又其の精神的英雄なる日蓮聖人が唱へた南無妙法蓮華經とは何であるかは是れ聖人が偉大なる人格の根本基礎をなせるものであつて、同時に其の活動の現相である、之を唱へる聖人の崇仰者は、聖人と同じく、自己を以て妙法蓮華經の活動を現實にするのである。若し口先にのみ唱ふる題目であつたならば實質な空漠なる南無妙法蓮華經であつて、一つの呪文に過ぎない、換言すれば南無妙法蓮華經にあらざる南無妙法蓮華經である、南無妙法蓮華經といふ代りに、何か外の事を言つても差支はない。其の口は恰も機械の如きものであつて、車が走るがうがうの音と少しも違はない、南無妙法蓮華經といふ發音に別に魔力がある。

は出來ないが、兎も角も此等の幾多の宗派の中で、一番現代思想と調和し得る、最も著しく活動主義を發揮して居るものは日蓮上人の説であるといふことだけは、明に言ひ得る。決して阿諛でも何でもない。ところが日蓮聖人の主義を奉ずる流の人々の中には此の主義思想をあまりに發揮し過ぎて、其の極暴れもの、ならず者といはれる様なものも……事によるとあるまいか、事によるとあるだらう……遂に聖人を以て暴れ者と言ふものさへあるに至らしめたのである。「彼は盜人のやうな人相だ」、「盜人ぢや無からうか」、「盜人らしい「盜人だ」と斯うなるのが世の常で、其れに似寄つた處が一二でもあると追々口に傳はる間に本物にされて丁う。夫であるから日蓮聖人が辨に筆に念佛無間禪天魔など、豪宕なる論辨を向けられると世人は驚いて「彼は暴れ坊主ではなからうか」「どうも暴れ坊主らしい」、「大方暴れ坊主であらう」、「暴れ坊主である」と遂に亂暴者にされて終ふ様なことになる……といふやうな調子で、今日の人は聖人を英雄僧と見て、我が國わけでもなんでもない、念佛でもさうである。南無阿彌陀佛と言つただけでも國家泰平の呪文になるなど、いふものは、ごくつまらない迷信で、淺薄な考である。矢張り口で稱名すると同時に稱へる人間の心に三心の具足を要するとか、信心の上の稱名とか必ず根本を心の上に歸して來なければ意味がない、題目とて同じことである、之を唱へる以上は眞の南無妙法蓮華經たゞ南無とは一つになる、冥合する、合致するといふこと妙法蓮華經と我々自身と一つになるの義である、即ち南無とは一つになる、……然し斯くいへば妙法蓮華經と我々に外ならない、……然し斯くいへば妙法蓮華經と我々と一つになること位は極めて易々たることで何でもない、御經を風呂敷へでも包んで懷へねぢこめば、それで一つになる、……そんな工合に一つに成るのでではなく、全體妙法蓮華經とは何であるか、今之を「御書」の中に見ゆる解釋によると妙法蓮華經といふものに三種の區別がある。其の一は八卷の妙法華經、即ち羅什

三藏所譯の經典のことである。之は別に解釋するまでのこともない。第二は宇宙萬有是れ即ち一大妙法蓮華經の當體であるといふのである。當體義抄の首めに、問ふ妙法蓮華經とは其體何物ぞや。答ふ十界の依正即ち妙法蓮華經の當體也とある。此の解釋によるも獨り文字で現された經典のみではない。此のアーブルもベンナも、諸君も我々も、山も川も一切皆妙法蓮華經の當體であつて、此處には妙法蓮華經の内に於て、妙法蓮華經を妙法蓮華經が餓舌つて妙法蓮華經が聽いて居るのである。之は今風にいつたならば、是れ哲學的解釋とでも云ふのであらう。次に第三の解釋は同抄に所謂・

妙法蓮華の當體とは法華經を信する日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是れ也。

といふものは是れである。己の弟子旦那は妙法の當體であるが、其の他の者は、皆駄目だと云ふのである。此の解釋は餘り勝手過ぎた解釋の様ではあるが、決してさうではない。聖人自身は、明に其の肉體も其精神も佛陀にはなつて居らぬのである。然らば如何にせば眞の佛と成り得るのであるか、曰く此の日蓮の如く妙法に一致し來れ、身心一如にして佛法と合致すれば汚穢の小身、父母所生のそのまゝ此の肉體もまたこれ妙法蓮華經である。日蓮の弟子旦那等といふのは、御布施を納めたり、頭を下げる奴を指して言はれたのでない、法華を身に行ひ、體現した人であるから、現實に法華經になつて居る人である。之を聖人は日蓮が弟子旦那等の父母所生の肉身即ち妙法蓮華經の當體なりと言はれたのである。此の文の最後に「父母所生肉の身是れ也」とあるのは最も注目すべき點である。妙法蓮華經は、我々の現身の上に活現すべきことを言はれたもので、聖人の活動主義は之からあるのである。我々の精神が眞理と合致すると云ふやうなことは、一般的宗教でいふことで、決して珍らしくはないが、聖人の心と言はず、殊に肉體直ちに妙法となると云ふて居

總べて徹底妙法蓮華經になり切つて居るといふ。大確信を有つて居られたのであつて、聖人生涯の活動は即ち此の確信の顯發である。……勿論日蓮聖人ばかりではない。一切衆生誰でも皆此の境地に至り得る資格はある。聖中の寶珠は誰でも持つて居る。されば聖人は四條金吾に與へたる消息の中にも、「御身は上行菩薩の魂を宿して居るが、釋迦の再来か」といふことを言はれて居る。聖人は自分の確信の上から末法の法華行者として神力品遺囑の上行は正しく自分であるとか、不輕品の不輕菩薩我なるべしと言つて居られると共に、眞の法華の護持者には誰にも此の名稱を與へることを躊躇しない。然しそれには實際上に體現し得たものでなければ駄目である。唯聖中の寶珠で、天台の所謂理即では致し方がない。所謂「何れの處にか天然の彌勒自然の釋迦あらんや」で資格のみでは何にもならぬ、今我々も諸君も確に本來佛である、三三が餘り見難い佛ではあるまい、イヤ佛となるべき資格がある、理としては佛の苦、即ち「苦佛」であつて、未だ眞の色の説である。只今も小林君のお話によると、毎日幾度も鏡に向つて顔を剃つた人があるさうであるが、幾らそんなに化粧をしても人間の顔其まゝが佛なりと言はれても餘り尊い氣は爲ない。けれども聖人は此の肉體が直に佛たる所が妙法であるといふのである。これが難信難解かも知れない。日蓮聖人は、常に三業受持といふことを言はれて居るが、即ち身も妙法蓮華經、心も妙法蓮華經、口も妙法蓮華經でなければならぬといふのである。其身口意三業の中でも此の肉身が妙法となるといふ點が最も特色である。我々の一舉手一投足も皆妙法活現の當體となる。此意義を省みないで、口ではかり何千遍南無妙法蓮華經と唱へても何にもなるものでない。先刻小林君の引用された『土籠御書』の「今夜の寒きにつけても牛のうちのありさま是ひやられていたはしく候へ」といふその次下の「法華經を餘人のよみ候は口ばかりことばばかりはよめども心は

よなす、心はよめど身によます」とある。此の御書は通常三業受持を示されたものと解釋して居るが、私のでは口、心、身と次第して居るけれども、其の特色としては身即ち肉體に唱へる點に最も重きを置かれたものであると信する。身讀の御書、體讀の御書である。身讀、體讀も出来ず、心にも讀まず、口さきばかりで南無妙法蓮華經と唱へる位では、丸で仕方がないものである。聖人の本意は、吾人の日常生活が眞に南無妙法蓮華經にならねばならぬといふ主義なのである。此の身讀體讀に二種の意があつて、一は法華經の爲めにならば何日何時にても命を奉つても苦しくない。即ち勧持品の「惡口罵詈等、及加刀杖者」とか「數々見揃出」とかいふ文を經文の通り身に實驗することを身讀體讀と言ふ、聖人は誠に其の通りの身讀體讀を行されたのである。然し廣く此の意を推して行けば、法華經其のもの、真理其のものを、身に實踐して行くといふことにもなるので、即ち二には世間百般の日常生活が直に此の妙法と契り、舉手投足が大道と合致し今まで戦鬪主義である。但し戦鬪といつても、怒つて争ふのではない、泣いて聞入るのである、先刻も聖人の慈悲に就いてお話しになつたが、全くあの通りで、聖人の折伏は法華の不輕菩薩の慈悲の行動を規範として強盛に下し、せめては逆縁も結ばんとの已むなき慈悲の前後手段なのである。世人は動もすれば聖人を怒罵的の人と見るのは、此の立場を知らなければ、小林君の所謂慈悲が其の根底となつて出發せる戦鬪である。これは外から見ると、如何にも本當らしくなく思ふであらうが、然し聖人が横溢して始まつたもので、小林君の所謂慈悲が其の根本の立脚地がそれであるし、それに聖人が始終其の事を言つて居られるので明である「日蓮は泣かねども涙ひまなし」といひ「日蓮が慈悲に及ぶべしや」と言はれて居るのは皆是である。日蓮主義は何時でも優しい心で、何時でも、雄々しく世の罪惡と戰つて進むのである、人類の進歩の爲に苦闘するのを第一義とするのである。日常の生活は戦鬪の生活である。四

て行く様になる。之も法華の身讀體讀といふことが出来ると思ふ。假分獵漁りをして百姓耕作をしても、其の爲すことが、妙法蓮華經の活現であれば、これ即ち南無妙法蓮華經である。南無妙法蓮華經はたい口先に唱へるだけならば僅に七つの文字に過ぎない、けれども眞の南無妙法蓮華經は火鉢を囲ひ茶話「今日はお暑う御座います」といふ挨拶も、所謂喫茶、喫飯、行住座臥が皆唱題そのものである、口で唱へるばかりではない、手でも唱へ、足でも唱へ、腹でも唱へ、頭でも唱へなければならない、唯南無妙法蓮華經と發音するばかりが南無妙法蓮華經ではない。法華行者にあつては「アーサイ」といふのも「オ、寒い」といふのも皆、南無妙法蓮華經の換言葉である。鍛冶屋のカン／＼も大工のコツ／＼も。われは皆南無妙法蓮華經といふ音である。

日蓮聖人の題目主義は、斯くのごとく法華經を身に讀む活動主義である。聖人は此の主義でもつて、生涯向ひで一杯の酒飲むのも、妙法の生活である。スーツと啜る音が、即ち唱題である。何で亂醉することが出来やう。一杯の酒なほ然りです、法華行者の心持は、常にこゝを行くのである。……然しこんなことを口で到底非常の人にはあらすんば出来ることではない。此處はいふが、中をひづかしいことである。心身徹底して、表裏一如、南無妙法蓮華經になるといふ様なことは、が兎に角聖人の理想であらう。然し出來るだけ努力奮闘して日蓮門流のものは何處までも此處に近づき、之を活現することを勉めなければならない。……唱へる題目は、あれは自分の考では、先づ進軍喇叭の聲である。心で南無妙法蓮華經を唱へるのは所謂作戦計畫である。此作戦計畫によつて身を以て行ふのが實戦である。實戦計畫だけでは空論になる。眞の值打は實戦である。況して喇叭丈を吹いたのでは何のしかたもあるものではない。若し三業受持が眞に出来て、日蓮の弟

子旦那等と呼ばれる様な身になり得たならば、始めて口に唱へる進軍喇叭も始めて勇しい、悲壯の音響と變じ、意味あるものとなるのである。三業受持といふのは畢竟三業唱題で、身にも心にも口にも南無妙法蓮華經と唱へ、渾身唱題に同化することである。若し現代の人の……勿論私であるが……果して此の考を以て活動社會に進むことが出来たならば最早それ以上の理想はあるまい。日蓮主義の現代思想と一致して、最も健全であると目せらるゝ點は實にこゝにあるのであつて、我々が日蓮聖人を崇拜し、少しでも之に近寄りたいと思ふ所以は實に此の點に存するのであります。

## 深敬病院訪問記

子爵・五島盛光

安穩の樂、世間の樂、涅槃の樂を與へんとは。大恩教主釋迦牟尼世尊が、法華經に宣説せしころにして、先づ生前に安んじて、更に没後を扶へんとは。法華身す。宜なる哉、近代日蓮主義者中、上人の大主義を社會各方面に用實現せんと試むるの士倍々多く。就中、上人の宗風に感奮して、諸種の感化救濟事業に從事する者、各地に續出し。殊に宗内のみならず、廣く世間の耳目を聳動せしめ居るもの甚からざる中に、獨鯨龍妙の經營せる身延山深敬病院事業の如きは、其の最も著明なるものなり。

上人語あり曰く「一切衆生異の苦を受くるは日蓮一人の苦と申すべし」(八幡抄)、又曰く「如來世に出で給ひては、生を愍むを本とす」(妙密抄)。謹んで是等の語を味ふに上人の教旨豈に涅槃大悟の樂を與へて、精神的の苦痛を除くのみを以て目的とせんや、必ず他の一面には、相對的慈悲を以て肉身を救ひ諸の苦惱を除いて、世間の樂をも與ふるものならざる可らずとは、予の夙に唱導する所、而して今や上人の末弟中に、幾多の救濟事業家を見るは、予は上人信仰者の一人として頗る快心の至に堪えざるなり。

讀の日蓮上人が、安國論中に示すところなり。予は常に上人の偉大なる人格に満幅の願意を持ぐると共に、更に又其の深遠高大なる教義に於て、一層の尊信を持つるものなり。

抑も上人主張の教義の本旨たるや。或る種の宗教の如く單に未來主義に傾かずして、法華經の教理を現實世界に行ひ、以て立正安國の大道を發揮せり、されば此の大道を以て、一面には、廣く世道人心を裨益すべき根本的大德教を樹立して、紛亂せる諸宗諸教の統一を示して、以て國民の精神界の歸着點を明にし。更に實際的方面に於ては忠君愛國の大本を發揚し、濟世利民の大益を與へんとするなり。其の主義の靈妙潤大なる之を國家社會の上に應用するに於ては、實に其の貢獻する所頗る博大なるを確信するものなり。

日蓮主義は、實踐躬行の主義なり、身讀法華の活動主義なり。徒らに空理空論のみを骨張る談理的宗教に非す。何れの時處を問はず、必ずや時代に適應せる活動を以て、現實の世を救濟するの舉に出でざる可ら

予は、身延深敬病院が、世にも憐愍すべき癡病患者を收容して、之を救護しつゝあるを聞き。一たび之を訪はんことを希望しつゝありしが、其の機會を得ざりしを遺憾とせしに、~~夫~~四十三年末を以て山梨縣下に於ける感化救濟事業調査の爲め、就中、深敬病院の視察を主として、同縣下に出張を命ぜられ、同十二月十四日前、新宿驛より一聲の汽笛と共に、轎轎たる長蛇に駕して山梨縣に入れり。

路すがら甲府市に在る山梨慈善保護會を視察せり、同會は免因保護を事業とせるものにして。目下の處は、司法省の管轄に屬するも。予は少しく故ありて之が調査を爲しぬ。更に歩を進めて、南巨摩郡増穂村代用感化院に赴けり。同院の經營者は米地義一といへりとも思はず、倍々改良進歩をこそ望ましけれ。されど予は、米地師が上人の末弟たりと言ふに於て、上人の大主義を斯る濟世事業の上に、實現實行するを感

謝し、更に一層の努力奮闘を希望すると共に、大に各地に於ける同門諸君の注目を請はんと欲するものなり

十七日、獄澤より舟に乘じ、午後二時波木井に着す。即日、予の這回視察の主眼たる、身延深敬病院を訪問せり。

言ふまでもなく、身延山久遠寺は、日本國の大祖師日蓮上人が、勇退高踏、深山雪深き處に、前後九箇年の間、經を誦し法を説し書を著はし、魂魄をも留めさせ給ひし、いやたらぬ靈地なれば、古より癩病患者の此處につとひ來りて、上人の徳光を慕ひ妙法の功力を味ひ罪障消滅を祈るもの多く、嘗ては身延川の畔に、こゝかじこ小屋掛を爲して群居しつゝありて、行人をしてそろに袖を濡らさしめたりしが、偶々現深敬病院主綱脇龍妙師、本山參詣の途次、此の悲慘の状況を目撃し。世に憐むべき不幸のもの數多ありとも、癩患者ほどいとも憐むべきものはあらず。宿世の因縁とは言ひながら。等しく人類に生れて、世人に嫌

の外、施療給與患者をも收容するに至れり。三十九年已來の状況を聞くに患者の收容せられしもの約百四十四人の多きに及び、内死亡者は十人なりといふ。附近の村民に就いて、死亡者に對する葬式の模様などを聞きしに、該患者中に死亡者あるときは、約三四名の僧侶これに立會ひ、懇懃鄭重の儀禮に依り、讀經廻向を施して之を吊ひ、恭しく墓邊に埋葬す。此の地方に於ける下層社會の葬祭には殆んど見ることを得ざる程なりと。嗚呼現世の不幸を悲しみし彼等も、死出の山路に歎喜満足の心を以て、深き感謝を表しつゝ、とこしへに御佛の數に入なるべし。

現在の患者の數二十三人、此の中全然施療給與に屬するもの六人、其の他は一圓乃至三圓五十錢の範圍に於て、入院料を納む、然れども入金する月もあり、せざる月もありて一定せざるものゝ如し。此の外僅に一泊若くは二泊を乞ふものありて、是等の者には、一夜十錢づゝを徵集する規定なるも、殆んど徵集し得ざるもの多しと云ふ。斯る慈善病院の常として、又止むを

悪せられ輕侮せらるゝは言ふもさらなり、親戚朋友知己の間には疎んせらる。彼等とても本有の靈光たる佛性を持して、終には佛世尊の救護に包まるべきもの、況

や法華經常不輕品には、彼の常不輕菩薩が、慈悲慈善の心に住し、如何なる微賤の人間をも悉く禮拜恭敬して「我レ深ク汝等ヲ敬フ。敢テ輕慢セズ。所以は如何汝等菩薩ノ道ヲ行シテ。皆當ニ作佛スベシ」とあるをや。我れ先師日蓮の如く不輕の跡を繼ぐこと能はずと雖、願くは以て其の一分たるを得んと、深く我深敬汝等の語に感じ。自己の終世を此の憐愍すべき癩患者の救濟に捧げんと決意し、時の身延山貢主豊永日良大僧正に謀りしに、同師又雙手を上げて之を賛し、遂に新に病室一棟を建築して寄附せられたり。時に明治三十九年にして是れ實に此の深敬病院の創始せらるゝに至りし根元なりといふ。

#### 四

爾來世の慈善家の同情に訴へ、廣く寄附金を募集し其後更に病室一棟と診察所一棟をも建築し、自費患者得ざることなるべし。

此種の病院に於ては、衛生上の設備最も肝要のことなるが。衛生上の注意頗る完備し居りて。患者中或るものは、労動に從事するあり、或は至心に御題目前を唱ふるあり。而して夏日は毎日、冬日は隔日に、患者に入浴せしむることなるが。これが爲めにや、患者中甚しき不潔の状態を見ざるも、元來病氣の本質として、一種の臭氣を放つものあるは、免れ難きのこととなり。患者中、楠田きよ子なるものあり、少しく衛生看護の心得ありて。毎日四五人の患者に對し、手足などを洗ひやり居れり、誠に殊勝の心掛といふべし。これ又同病院諸氏の感化の然らしむるところなるが。綱脇院長は、三日毎には必ず衛生消毒を自ら施しつゝ、健康の保全を計り居れりといふ。冀くは斯道の爲め充分の攝養を希望して止ます。

病室二棟は。之を男女に區別し、冬期は一小室毎に

爐を設けて暖を取らしむ。  
病室の如きも極を設けて、消毒を施したる汚水を、山麓の地下に吸収せしむる方法を取り。用意の周到なるを見るべきなり。

## 六

又棟を別にして、禮拜堂の設けあり、これ彼等の爲めに、唯一の慰安場にして、彼等の多くは、異口同音に法華經を讀誦し、太鼓を擊ち、題目を唱へて、至心に祈誓を凝らすを無上の樂しみとせるものゝ如し。  
又一週一回山内僧員の説教あり、これに依て彼等は心靈上の福を得、悲哀の雲に蔽はれつゝある彼等の運命を慰め、法華最第一の佛力法力によりて一道の光明に接觸するなるべし。聞くところによれば、他宗他門のものにも、入院當時は、御題目を唱ふることを好まさる者も此地に來れば、おのづから法華經の信仰を起し、遂には熱心なる信者となり。頻りに題目を唱へ經を誦するに至るといふ、地靈にして境尊きところ、聖祖師日蓮の不言説法が、知らず／＼の間に、に揮しつゝあると共に、特に卿等の名譽たることを確認し、更に進んで此の善事業、此の勝妙事を、大に輔作して以て、之を發展擴張せしめよ、至囁至囁。

予は翌十八日、久遠寺に詣ふて、我が深大の渴仰を捧ぐる聖祖師の靈廟を拜し、十九日大野より富士河を下りて歸東の途に上れり。

此の種の病院は、全國に五六箇所あり、而して、東京、静岡、熊本に存在するもの、多くは異教徒たる外国人の經營する所たり、我國人に依りて、殊に日蓮主義僧侶の手に依りて經營せらるゝものは、唯此の深敬病院あるのみ。

想ふに、予は未だ他の病院を視察したことなきを以て、之を比較對照すること能はざるもの、他の病院は創立の久しき等に於て、其の設備の如き之に勝るもの多からんも、獨り本病院が、世界最第一の經典たる法華經の寶玉を握り、日蓮主義といへる最高完全の妙教を占有する上に於て、修養上、信仰上、患者に最勝甘

彼等を感化するに由るもの乎。

## 七

病院維持の方法としては、寄附金一厘講、慈善函、患者納金、積立金利子等を以て、之れに充て居れり。現在のところ、五百餘圓の積立あり。今や千五百圓を投じて、二十二坪半の事務室と、十九坪の物置とを建設しつゝあるが、更に來春三月頃より、男女病室二棟を新築する豫定なりといふ、最初院長網臨師の考にては、先づ病室の改築を爲さんことを希望したるも、一は本山に對する關係上、一は清分寺内より通ひ居るの不便等より、止むを得ず事務室の新築を先きにしたるものなりといふ。

村内一般の本病院に對する評判を聞くに、齊しく衛生上より、院の設備の行届けるを喜びつゝあると同時に、何人も着手し難き此の難事業に、網臨師が獻身的に當れる其の奇特なる行爲に敬意を拂ひ居れり。語を寄す、身延村民諸君よ。卿等の村内に斯る善事業を存在しつゝあるは倍々聖祖師日蓮の遺風を實際的露味を與へ得るに至ては、何ものか能くこれに比肩することを得んや。

統計によれば、我國は癪患者の數に於て、歐洲列國に比較し、最も多き數に位すとかや。されば此種の病院の必要は、今更吾人の嘆々を要せざるのみならず。就中此の深敬病院の如きも、倍々發展擴張するの要あるは勿論のことゝもあり。

願はくは、世間の仁人慈士は勿論、特に我日蓮主義の同行同信諸君の深厚なる同情助人力に依て、癪患者の收容を倍々多からしめ、慰むべき我同胞の疾苦懊惱を除き、濟世救民の一助を爲すと共に、聖世の恩澤の萬分に酬へ奉らんことを切望す、嗚呼これ活ける日蓮主義に非すや、二十世紀の新時代に適當なる活ける法華身讀に非すや、玆に深敬病院視察の状況を記すると共に、聊か予の感想を述べること爾り。(完)

# 慶長元和に生れしめば

(一月十五日東京浅草第一義會に於ける講演大要也)

野口日主

私の演題は新年勿々餘り古めかしい様ですが、昔より温故知新と申すとがありまして、新しき事を真に知り得るには、故きを温ねねばならぬと云ふ、古人の教に基いて、愈新らしき意義を發揮するために、斯く古い様な題を掲げたのであります。

世人は能く云ふ事ですが、「予輩をして元龜天正に生れしめば、太閤家康に及ばざるも必ず一國一城の主となりたらんものを」と、言一時の興に出たることとするも頗る興味のある文字である、その言葉を移して今の日宗僧侶信徒をして慶長元和に生れしめば、如何なる地位に立ち、如何なる行動を爲せしか、身批評の地位に立たず自ら其境遇に處する考を起すならば、そこに修養と決心とあることを思ふ、日宗歴史中特に慶長元和を擇びしは、同時代ほど日宗に取りて大變革の時はな長元和に限らんので、遠く釋尊の御在世に生れしめば釋尊に就くべきか、婆羅門に從ふべきか、亦宗祖の御在世に生れしめば、土岐常師として金穀を貢いで外護の大權那たるべきか、四條金吾となりて誠信者の摸範たるべきか、船守彌三郎となりて貧寒の身に末法の弘通者を庇保すべきか、或は天文法亂に生れて比叡山十五萬の兵を引受たると、策を講ぜし能化となるべきか、法の爲め戦死の中に加るべきか、經には「觀彼久遠猶如今日」と説かれてありますが。今は昔なり昔は今なり、三世一貫佛教の心體である、今假りに日本歴史を船乗りの海上に譬へば

祖師御在世より  
(風波激怒)  
(潮流不定)

天文法亂まで  
(潮流静穩)  
(風波愈激)

明治時代  
(潮流殊好)

かつたのである。  
日蓮宗風の念佛宗風化せしは則ち此時也、我が日宗の發展進歩主義が、消極退要主義に移りしは此時である、然らば其義を述べよう、觀よ、前には豊太閤大佛供養問題あり、受不施不受不施の別れとなり、大義名分を守りて此の供養に應ぜざる日奥上人は、對島十七年の遠流となり、大義名分よりか時の天下の命是れ奉するの一派は、皆悉く顯榮に用られて名利の貪慾に耽り得たのである、若し此時に生れたならば、大義名分を奉持して遠島に與するか、或は大義名分を捨てゝ顯榮に處せんとするか、吾人は其時に生れたるものとして深思すべきである、亦後には徳川の消極政策に反対し、爲法爲國徳川政策を諫曉せし常樂院一派は、剃頭の慘刑或は遠流に處せられたのである、斯の如く一方は時の天下の命令ならば念佛をも唱ふべしとの一派は無事安樂に一生を終りたのであるが、若し此時に日宗僧侶信徒に生れて居つたならば、何れに就くべきかは深く思ひを致さねばならぬ事である、が是れ豈に慶流烈しきとの理由のもとに船を淀泊して手を空ふせし感がある、今や明治時代は、天氣晴朗潮流亦好の時である、苟も法華大乗の甲鐵艦に乗れる艦員は橋頭高く法旗國旗を翻へして航海の途に上らなければならぬ、特に況んや今回の二十六人無政府共產主義の現れの時に於てをや。  
日露戰役當年に於ける吾が海軍行動の順に微へば天氣晴朗、敵艦見ゆ、諸員奮闘せよとも見るべき也。爰に年改まりて亥の新玉を迎ふると共に、立正安國主義を奉するもの、奮闘努力の今正是其時にあらずや。身僧侶と信徒とを問はず大に奮闘一番を期せなければならぬ。  
後の今を見る事尚ほ今の古を見るが如し、今にして意義なく一生を空ふせば後の批評を如何せん。

前二期時代は風波激怒潮流烈しきものあつたのである

(九段銀行社に於ける天晴會演説記)

## 歐洲紀行談

代議士 板倉 中

私の旅行は極めて短期間に成る可く廣く且つ多く見たい考へより、印度洋を経て歐羅巴を過ぎ、而して亞米利加へ向ふ豫定でしたが、亞米利加は曾つて彼地に遊んだこともあり、又友人の渡米せる者ある爲めに其事情を窺ふことが出来る、寧ろそれより露西亞の事情を聊か觀察して見ようと思つたので暫く歐洲に滞在することに決したのである。

この旅行に於て私は社會の凡ての點に着眼し留意し得る所太だ甚からざるものありしも、本日は其間に於ける予の宗教觀をお話したいと思ふ。

初め印度方面を旅行する際、錫崙島に客港し都合上、船が三日間碇泊したので、其れを幸に上陸して此地を見物したのであるが、此に釋尊時代より存せしものと傳へられし疊四疊大的大木・菩提樹がある、而も神聖なる樹として周圍に鐵繩を設けてある、其傍にいと古

實に驚く程である、獨逸の如きは彼有名なるマルティンルーテルの出た國にも拘らずカトリックが盛である、露西亞は尤も宗教の盛な國で熱心なる信仰者が多い様に思はれる、佛蘭西は表面カトリックを信じて居る様ですが實際に信仰があるのでない、私は二ヶ月間で居た、即ち第一に上流社會の有様を觀察し次に中流第三に下流社會の生活を試みたのである、然るに上流社會では今日進歩せる科學思想と宗教と相容れざる點がある。中流社會になれば日曜には教會にも行かないで空信者らしく裝入て日曜には教會に行くことにして居る、中流社會に在れば日曜には教會にも行かないで空しく其日を費して或歡樂に耽つて居る、これ等は直接宗敎其ものより来る影響といふより寧ろ社會の習慣が見える、が然し一方に於て自己の地位を保つ上から信力より及ぼせる結果ではあるまいかと想ふ。

英國に於ては實に暮はしく感じたことが少くない、

めかしき一字の寺があつて時怡も祭典で非常の參詣者があつた、私は直ちに老僧に面會して話を聽きたいと思つたが一向語不通じない通譯でもと訪ねたが居ない如何とも詮方なく殘念にも得る所なく別れを告げた、蓋し老僧の語る所は甚だ淺薄なる教への様に想はれた聞けば此古刹には釋尊の齒を納めてあり此地に曾て休憩せられし靈跡であるといふが、私は今日の状態を観て慨嘆に堪えなかつた、而して私は「聞くならく釋尊の時代あはれ盛なりし佛教は消へんとして僅かに其影を存して居るあゝ衰微せることよ」といふ意味の罵倒的詩を作つた、往昔佛教の盛なりしと共に其感化的多大なることを耳にせし彼地も今は少かに小乘佛教の存するのみで殆んど耶蘇教の蹂躪する所となり、夢想だにも古の面貌の偲ばれないのは實に慨嘆に堪えない、予が一詩を作りしも亦その所以は此にあるのである、諸君も御承知の通り印度は既に英領に歸し從つてカリクの宗教も随分盛である。

殊に英獨佛等歐州各國に於けるカトリックの進歩は私は倫敦に滞在して知人も出来たのですが、一寸言へば英人は全體お世辭が少ないので實際には至つて親切で正直である、而もそれが下層社會迄も一般通じて然である、商業上に關する親切正直は勿論、道を訪ふても能く町噂に教へてくれる、若し迷んで立ち止つて居れば態々來つて取るべき方向を教へてくれるといふ風で極めて誠意親切である、殊に正直の一例として感すべきことは漫徒がないことである、尙紳士淑女の態度として賞すべきものは電車等に乗る際に誤つて他人の足を踏むとか実當る様なことがあれば却つて向ふから誤られて赤面することがある、電車賃は乗客自ら出入口に設けられし一定の箱に入れる様になつて居るが無論タゞ乗りなんか一人も居ない、要するに彼等國民は皆我英國は世界に超越せる國であるから吾人は須くセントルマンの資格を保つべしとの自覺を有して居る、従つて大中小學校に於ても品性を重んずること深く、如何に學力優秀なりとも若し品行不良なる生徒には卒業證を與へない、此美風は普通一般の社會にも重んぜ

られ、平常の服装の如きも依然として紳士の格を失はない様に心掛けて居る、中折鳥打帽も全く見受けないではないが、稀に見るのみで多くはシルクハットである、服も多く一定して居る、此等の點から見ても歐洲に於ては先づ英國を以て尤も勝れたる國といはねばならぬ蓋し此美風を存せしや宗教の偉大なる感化が與りて力あるものと思ふ。

斯くて文明の度も先づ英國に指を屈し次に佛蘭西次に獨逸といふ順序であらう、首富やベルギーも餘程進歩せる國であるが英國に比すれば遠く及ばない、オーストリアハンガリーも立派な國であるが英佛には及ばぬ、マア獨逸に匹敵すべきでせう、要するに之等文明諸國は何れも宗教の感化と教育の普及如何に大に起因する所があると思ふ。

予は首富に在ること十四五日、(山水明媚の風趣佳景に富める國で、獨佛人の歸留せる者、残に米人が尤も多く來て居る)此間私は宿を轉々して社會の狀態を見聞した、或時宗教の事を聞けば彼等の信する多くの無政府主義者蜂起してザール皇帝を殺すべしと議し大臣を排すべしと叫び、平素の留歎を吐く機會を期して亂暴を敢て爲すに至るのである、彼等の如き徒黨は倫敦や巴里にも集會を開き大言壯語叱呼して其意旨を實現せんとする者もあるも英國民は誰一人之に加擔するものなく、警察官も平然として制裁を試みることもない、彼等は一の會議を提供して空しく散會するのみである、其のが爲に國民は少しの刺激もなく動搖されることもない、佛國の政治家アリヤンの如き社會黨より出身せるにも拘らず、社會黨に反對して政治界に奔走して居が、アリヤンの意見が正當なる爲め遂に社會黨の意旨は泡沫に歸し丁つて彼等は起つの機を消失するに至つて居る狀態である、然るに露國は言論を以て自己の意思を發表することを制し、著書を以て其識見を社會に訴ふることを禁せし爲め彼等の鬱憤を晴らす機會は殆ど得られない、僅かに少しの欠陥を窺つて亂暴を行ひ或は爆烈彈を以て紛擾を圖り以つて政府を破壊せんとするのである、要するに斯かる動搖を來

所は多くはカトリックであつた、而して私の信奉する宗教は?と問はれたので、私かに此處が如來の方便だと思ひ予はカトリックである、彼日本の東鄉大將も矢張りカトリックの信仰者である故に斯の如き偉大なる人物となつたのであると答へた所が、彼等は非常に悦び大にもてなしたことがあつた。

露西亞の國民は、全く宗教を捨てゝ居る者もあるし、又希臘教のコリ固りもある、が多々は拜神思想強く寺門を通過する際には跪いて禮拜するて柔順なる善良の性質を有して居るが、彼國は如何にも政治機關が不完全である爲め、豫て旌衣飢食で勇氣あり健闘の氣象にも乏くない體格も立派であるにも關らず、常に統治が圓滿に行かぬ、代々の帝王は爆烈彈の危害を加へられ社會主義的行動は至る所に演せられる、獨逸、佛蘭西、首富、ベルギー、伊太利、等にも屢々亂暴を企て罷工を行ふこともあるが、露國に於けるが如き甚だしき事はない、思ふに露西亞では凡ての集會を壓制し、言論の自由を拘束し、專制の權を擅にする所から、

すのは露西亞の專制が然らしむるのである。  
尙一言したいのは今後世運の發達進化に伴ひ、經濟的状勢より堂々たる學理を以て社會主義を唱導する者が起つて来るかも知れぬ、之を壓伏し根本的に矯正せんとするには單なる人力を以て行はんとしてもダメである、今日社會黨に關する書物は随分ある、殊に英語の書物として讀まれて居るものは甚だ少くない、といつて之に關する書を讀むことを絕對に禁せんとするは到底不可能である、他に積極的に社會を健全にすべき方法を講じなければならぬと思ふ、彼英國の如き健全なる國風を作つたならば、如何に社會主義者が巧説論議するも民心を動搖するなく社會紊亂の憂もないであらう、蓋し彼等徒黨の論や極めて薄弱である、予は如何なる事があつても彼等に敗北することは斷じてないと確信して居る者である、が然し腕力を以て彼等を壓伏し斷滅せんとしても出來ないことである、即ち此に偉大なる一種の靈力を以て威壓し絶滅して眞に健全なる社會たらしめ秩然たる國家の光輝を益々宣揚せんことを切望して止まない次第である、(完) (文責在記者)

# 報道

## ◎雑誌『日蓮』の刊行

本年一月より岡山市日蓮講師會員等相謀り同地の重鎮祐仁事一師を主導として日蓮と題する雑誌を刊行し、其の一號及二號を寄贈せられたり、其の外形は頗る意匠を凝らしたものにて一見人目を惹くに足り、初號に於ける「發行の辭」は沈痛の程に前途の祈願と發誓とを頗る簡潔に之を叙し、姉崎博士の安國論中の聖説英譯は一層の光彩を添へ講演には本多大僧正能仁主導其他の卓抜なるものを載せ、他の記事中々に懸やかな更に第二號に至りては外形内容ともに一般の精選と整頓とを加へ倍々其の特色を發揮せしものゝ如く、殆ど都門の雑誌をして後へに惶若せしむるの概あり、冀くは信教華の革命軍の先驅者として亦日蓮主義普及の經王軍として倍々健全なる發達を望む。

## ◎東京 教信

③ 東京天晴會新年大會 一月二十二日午後一時より九段會社座上に開催新年初會なりし

きの生活に入るの念を惜しむるものあるの感あり、午後一時半正しき修法を終りたる後慶長元和に生れしめば

野口僧正

國は法に依て昌ふ

右の講題にて詳々切々其主義と歸點を詳述し無限の靈光に浴せしむるものあり、講演終りたる後實前供へたる酒を謹請者一同に頃ち何れも歡喜法悅のうちに散會したるは午後五時にして百餘名の參聽者ありたり。翌十六日は妙教華會の例會定日なるを以て會員には夫々通知を發し廣告及會場並に案内によりて遺憾なく堅韌せられ、午後一時半より本多大師の下に嚴肅なる法要を行ひ國連降昌大法流布の所願を爲したる後左の講題にて熱心なる講演ありたり。

因縁所生の法

井村僧都

本多大僧正

講演終りて甘酒等の供養及松本辨護士の所感等ありて和氣藹然怡かし一家風の圓融して其

趣味を與にせるが如き感あり、始人會員は現今百數十名にして何れも熱誠不朽の信仰に安住し、佛陀無限の靈光に包まれたるものゝみ同會員は毎會缺席なく定期より詰めかけ来るの事實は亦いかに求道信法の念の厚さかを證するものと云ふべし、または漫遊の漫季に生

を以て來會者百餘名定期に至るや姉崎文學博士の千里眼と心魂學との關係につきて學理上頗る有益なる講演あり、續いて三宅雪齋博士の

教義本位と人格本位なる講題に依りて莊重なる論辨を振ひ、現代人生社會の缺點を補足し之に靈力を與ふるには日蓮上人の如き偉大なる

大佐は御國體に就てと云へる題下に堂々たる人格を學ばざる可らざる所以を論し人格本位論を唱導して多大の感動を起し、佐藤海軍

大佐は御國體に就てと云へる題下に堂々たる論式を拂ひ引説該傳辨論風發二時間に亘りて

其要義を述べ、更に國體の精神と宇宙絶對の大德教との關係本論に入らんとせしも豫定時間のため二月の例會に標講することとして確

を降るや木多大僧正は日蓮主義と國士と云へる卓識なる講題を授けて登壇し現代人心危機の秋大に國士を以て任じ、至誠國家人生のために殞るゝの士なからざる叫らざる所以を序説

としてさらに進んで特に研讀調査の結果に成れる現代思潮の試験及び之が教説第殊に社會主義者に対する重要な問題にまで論及せられんとしたるも時計は已に午後六時を報したるを以て淮懲ながら次回に講演することとし直ちに食堂に晚宴會を開き、宴席なるのとき松本幹事は入會者の石橋海軍少將外數名の紹介を爲し、午後九時林陸軍少將發聲にて天皇陛下の萬

は無上の幸榮と謂べきである。

◎淺草妙經寺野口僧正是昨夏十三日會を組得られたる幸として此の大法の妙義を味ふを得る。

④ 淺草妙經寺野口僧正是昨夏十三日會を組得し毎月十三日講演會を開き、廣く信男女の聽法

か満足せしめつゝありしが、一月十三日午後二時より新年初會を開き、關田僧都の信心の功德と云へる有益なる講話ありて多大の感動を與へ散會したるは午後四時半なりしと云ふ。

◎鈴木身行氏は多年實社會に在りし奮闘の生涯を送りしも感する所ありて、かこのだび野口僧正を師として發心するに至り、客年十二月二十日、東京淺草妙經寺に於て嚴肅なる剃髮式を行へり、當日野口僧正是授戒師として關田僧都

正發聲の下に天皇陛下萬歲顕本法華宗萬歲本宗大學林萬歲を呼稱し各自散會せり。

## ◎千葉縣教信

眞本法華宗第四教區に於ては古教條規改正以來その實行を期せんにはと一昨年來教區を東西兩部に分ら各部内寺院住職は毎月壹回宛各自順番に一定の下に集合し、熱心に布教しつゝありしが、星斗一轉年並に改り、新春勞頭第一に長生院豊田村大樂寺に於て一月十一日本年第壹回西都布教説を開催せり、當日の演題並に辨士は左の如し。

開會の辭

人格の修養

講解

新年所感

聖經の訓説

實業と道德

日本上人と社會改良

東洋中學教授

篠崎安五郎

森川布教師

田久保日城

倉上勝榮

光本布教師

土屋眞客

誠を三唱し、次て小笠原海軍大佐の發聲にて天晴會萬歲を唱へ、食堂を撤し、福引等の餘興ありて散會したるは午後九時半なりき。尚ほ木多大僧正は代議士坂倉中君等と暖爐を囲みて風傳に奮勵したるがため、社會中流以上の地位を有する信男女の熱烈なる信仰を喚起せしものを得るに至れるは爲法爲國欣ふべき現象と謂ふべく、本年一月の例會は十四日例刻より本多大僧正の聖語錄の講讀ありて、縱横無盡に佛陀論を詳説せられ、聽講者林陸軍少將矢野大審院檢事小笠原海軍大佐鄭外務翻譯官等の數十名は皆悉く、久遠實在本佛の廣大なる慈悲救濟の靈力を感識し、宗教上の根本第一義に接觸するを得たるものありしを見受け、翌十五日は第一會の新年初會にて正門には大旗を交えし、實前には莊嚴の美を盡し、特に靈前密室及清酒を供へ、香華は道風に吹かれて、香の清瀟を奥くりて、參聽者をして自ら莊嚴の感を起させ、延て烟霧撲滅せる人生々活の境涯より清き

つて一條の演説を試み補揚大賛成にて可決  
座興漸く而にして五分間演説を開き田久保  
倉上及び殊に東部の森川光本兩氏の勇壯なる  
警慨談等あり大に花を咲せ何れも氣焰萬丈衝  
天の極あり吾人は今後更に布教の爲層一層奮  
闘意力すべしとて茅出度散會したるは午後八  
時半なりき當日會するもの神田、田久保、白  
鳥、篠崎、小高、鈴木、十枝等販拾有餘六名近  
來の盛會なり尙當日は一昨年未來より西端寺  
院に於いて智識普及の目的を以て組織せられ  
たる「圖書たのもし會」第四回抽籤を行ひ白鳥  
開安君當籤したり

茂原道路布列

備前和氣敷報

より舊年内に於ける安宗信傳（新通西戸天聖  
二月眞宗一月）及び會員增加の報告と會員の  
意方に對し謝辭終て快談。刻漸五十時を告ぐ  
や真哉を三唱し一同小學校の拜賀式に參列原  
田上人恒次像之祐氏の祝辭演説ありたり  
因に十五日には婦人會の新年會にて皆勤者に  
は念珠の賞品を與へ福引其他の餘興をなせし  
と云ふ

（三木生）

廣島教信

◎大橋右教師は島田僧都溝口徳の兩師と共に  
一月十三日本照寺本堂に於て國源隆昌大法流  
布の法要を斎修し終りて大橋右教師は法事經  
より製たる新年觀なる題下に説教を爲し午後  
五時より新築の方丈に於て檀家總代及信徒一  
同列席し新年宴會を催すし歎談笑語和氣滿々  
として四十四年の天地に宣教の大業を遂行す  
べく相約し各胸襟を披へて歎を盡し福引の餘  
興ありて後百々正利氏の發聲にて陛下の萬歳  
を三唱し法運發展の萬歳を唱へて散會したる  
が頗る盛會なりしと云ふ

◎昨年以來廣島市寺院に在りては寒中説教の  
全てを爲し之を實行し來りたるが一月六日入  
寒の日より十五日間毎夜七時より八時迄修法  
八時より九時まで大橋右教師主任となり禮執

廣島

より暮年内に於ける義宗信宿（嘉慶四月天皇  
二月義宗一月）及び會員增加の報告と會員の  
靈力に對し謝辭移て快談。一刻頃十時を告る  
や萬歳を三唱し一同小學校の拜賀式に參列原  
田上人恒太郎之祐氏の祝辭演説ありたり  
因に十五日には婦人會の新年會にて皆勤者に  
は念珠の賞品を與へ福引其他の餘興をなせし  
と云ふ

東海道臺幸

鼓吹し大に贊同を與え散會したるは午後二時  
過なりき因に記すニ宮信徒中澤元司氏は道路  
布教の爲毎回老軀を厭はず種々斡旋せられつ  
ゝあるは感謝の至りに堪えず。(伏仙)  
◎縣下は一昨年來貴風會設立後大に風教問題  
に注意を拂ふに至り從て宗教と自活風教の關係  
交渉に就て研究するもの多く爲めに日蓮教徒  
徒は立正安國の大徳教を提げて其眞義を説く  
の好機に會しつゝあるのとき幸なる哉我教團  
の眞信信徒は幾多の方面に於て全身の努力を  
爲しつゝありしと云ふ

京都通信

事と謀叛を行へたるが裏腹に御馳走の席  
夜をも原はすして参詣の禮拝の多かりしに如  
何に求むに厚きかを知るなり尚ほ一月二十一  
日より二日四時迄妙説寺に於て鳥田顯惣師主  
任の下に執行せられ頃る盛會を極めたりと云  
ふ

◎睿智年九月晦下高田郡吉田町蓮華寺主安田臺城師發起となり精神修養と地方改善の目的にて同志の睿智年を募り吉田町講演會を組織し毎月同寺に於て十日廿五日の兩日修養講話會を開かれ一面には修養と稱する手製雜誌を作り何人にも投書の自由を許して一般へ週覽せしめつゝありしが何分安樂門徒と稱して世にも名高き程の土地柄とて相變らず宗我の墙壁をなし爲めに發展上思ふに任せざ甚だ憤慨に堪へざるもの多し然れども會長以下同志僅々廿会名固く異體同心の聖訓を遵守しつゝあることは恐らくは當町諸種の會中を通色々ながら人乎之に加ふるに昨冬監督右教師の御選教以來大に活氣を生じて一同の意氣愈々健全就中今回元山縣郡長現町長從七位三村慎一氏本會の趣旨を贊し今後大に盡力せらるゝことなりて特に高田郡視學小川用新一氏の如き念佛宗徒にありながら卒先應接せらるゝこととなりて會勢積に振ひ去る一月十五日警醒びらを各所



## ● 千葉縣下野本泰寺檀家

金貳拾圓 本泰寺檀家中(五完) 六圓 飛  
舖恭子 武圓宛 伊藤甚藏 全千代吉  
山本其平 全才次 全福治郎 壱圓宛

志賀次三郎 中村立岐 全新藏 大  
綱源六郎 伊場義三郎 中庄村藏 六  
拾錢 中村吉平 四拾錢 中村時太郎  
全源藏 全民次郎 全六太郎 全國松

金六拾錢 土橋徳太郎外二名(第四回)  
金貳拾圓(七)

神奈川縣小田原妙經寺 檜家中

金拾五圓完 千葉縣押堀高福寺兼住 橋山會章  
金拾圓(四)

福井縣山內本行寺 檜家中

千葉縣押堀高福寺兼住 橋山會章  
金拾圓(四完)

千葉縣柏崎妙願寺 檜家中 檜山吉尚  
金五拾錢完

京都府新橋通 杉山吉尚

## ● 千葉縣小堀蓮成寺檀家

金拾圓 住職齊藤自正 壱圓宛 森川彌  
吉 全竹五郎 藤乘貞助 大野仲藏

全竹五郎 参拾錢 中村庄八(第四回)  
金貳拾六圓四拾錢

靜岡縣西覺坊住 輒倉一乘  
金拾圓(一)

千葉縣押日紫雲寺住職 大川圓精

金四圓(四) 東京小石川本念寺檀家 渡邊忠久  
金五圓(四) 全 寺檀家 児玉房吉

● 千葉縣洞井戸泰行寺檀家

金壹圓完 高田長太郎 宮山忠五郎 六  
拾錢宛 國吉安五郎 丸山久四郎 宮山  
勘造 鳥澤半次郎 全文次郎 康徳大  
郎 四拾錢 土橋龜太郎 五拾錢 齋田  
吉太郎外三名(第三回)

(第一回)

## ● 千葉縣大成安立寺檀家

金壹圓完 住職山下純秀 二圓宛 森勇吉  
森雄治郎 豊國五拾錢 高山吉太郎 壱  
圓 加藤豊吉 六拾錢 森丑松 五拾  
錢 森勇八 豊國廿錢 森吉治郎外八名  
吉太郎外三名(第三回)

(第一回)

## ● 千葉縣喜多壽福寺檀家

地引喜四郎 深山喜十郎 原田誠 白  
井林誠 田中才吉 小川彦太郎 大野  
作藏 石井武吉 藤乘和助 高橋美明  
松本佐吉 五拾錢宛 古山義助 藤乘彦  
次郎 四拾錢宛 鶴澤倉藏 日色友治  
御須治助 八木重秋 小川仁作 藤乘  
治郎吉 石井定吉 桃木福六 卅五錢  
白井兵一郎 參拾錢宛 藤乘吉兵衛  
鶴田喜藏 大野清次郎 深山初太郎  
藤乘萬吉 全久三郎 今井淺吉 松本  
愛之助 鈴木仁作 廿五錢宛 大野清吉  
藤乘岩吉 小川才次郎 桃木庄五郎  
古山喜藏 五圓九拾四錢 藤乘清作外三十  
三名(第二、三回)

## ● 千葉縣津山弘通所信徒

金貳圓完 多羅尼善 高山常吉 山形民  
代 上田一郎治 山名資吉 壱圓宛

玉置圓次郎 上田よし 六拾錢 岸本清  
五郎 四拾錢宛 山形千代野 全やす野

## ● 静岡縣大土肥妙高寺檀家

金壹圓 住職木下顯通 壱圓宛 渡邊仙之  
助 神尾茂右衛門 今井長之助 八十錢宛

金拾圓 住職今井日省 五圓 津喜三郎  
武圓完 吉澤伴大郎 森庄五郎 植田耕  
藏 七拾錢宛 吉澤松藏 森庄太郎

四拾錢 高山松平(第四回)

## ● 京都市擾木町妙滿寺門前

金壹圓完 宮崎力三郎 塚本儀助 岸上  
安之助 高橋甚之助 小西徳兵衛 千

代元政大郎 鶴野田治平 下桐清三郎  
吉澤嘉三郎 桑原ヒテ 内堀彦七(第七  
回)

## ● 静岡縣伊東妙隆寺檀家

金貳圓 住職勘助 六圓 妙隆寺檀家中  
四拾錢宛 杉山宇之造 堀井利兵衛

山口梅次郎 黒見源達 鈴木寅之助(第  
五回完納)

## ● 大阪府耳原法華寺檀家

金貳拾圓 平田鴻次郎 武圓廿錢 虎  
谷繁三郎 武圓 虎谷市太郎 全理吉

全喜太郎(甲) 全新次郎 全喜太郎(乙)  
壹圓四拾錢 増田廣太郎 津崎吉太郎

壹圓五拾錢 黑川平吉 壱圓宛 西林彌一  
松川爲吉 山中たか

## ● 愛知縣野田法華寺檀家

金貳圓五拾錢 平田鴻次郎 武圓廿錢 虎  
錢 高橋譽四郎 武圓 祇谷金作 壱圓

金貳圓廿五錢 住職西山日説 武圓六拾  
錢 高橋譽四郎 武圓 祇谷金作 壱圓  
圓宛 荒木宗次郎 西方勝海 武圓宛  
拾錢 河合祐三郎 壱圓宛 渡邊和市 河合  
爲次郎 九拾五錢 高橋伊代吉 八拾五



# 統一

號三十九百第

人格本位と教義本位

文學博士 三宅 雄二郎君

日蓮主義と國士

大僧正 本多日生師